

研究ノート

ソロモン諸島・マライタ島ランガランガ・
ラグーンにおける貝貨製作

後藤 明*

はじめに

ソロモン諸島は1978年にイギリスから独立した。現在は7つの州をもち、首都はガダルカナル島 (Guadalcanal) のホニアラ (Honiara) である。この国は多くの島からなるが、総面積は29,785平方キロ、人口は1986年段階で28,5176人であった。調査を行なったマライタ (Malaita) 島は周辺の環礁をあわせて州を形成し、その州の総面積は4,219平方キロ、人口は80,932人を数え、州都は島北西部のアウキ (Auki あるいは Aoke) である (Laracy 1989)。

島中央部にはコアラアエ (Kwaraa'e 人口12,500人) とクワイオ (Kwaio 7,000人) といった大きな言語族があるが、この地域の西海岸部に20kmほどの長さをもつラグーンがランガランガ語族の居住地である (第1図)。ランガランガ (Langalanga) 語族の人口は2,000人程度で、すべて海岸かラグーン内の人口島に住んでいる。ランガランガ・ラグーンは、北部のラウ (Lau) ・ラグーン、南西部のアレアレ (Are'are) ・ラグーンと共に、広大な「礁湖」的環境を形成する。

ランガランガ地域は貝貨製作で有名である。ランガランガの貝貨製作については1900年代の初頭ウッドフォード (Woodford 1908) が簡単な報告を行っている。さらにクーパー (Cooper 1971) が、60年代後半における貝貨に関する経済関係の報告を行っている。ランガランガで製作されるようなビーズ状貝貨はメラネシア帯からミクロネシアの一部、および台湾内陸部 (アタヤル族) などで使用されている。一方、柳田国男の「海上の道」

でも取り上げられている子安貝 (宝貝) 製の貝貨は、パプア・ニューギニアや東南アジア内陸にまでみられるものである (大林 他 1990)。

東アジアから、東南アジア・オセアニアにかけて、貝をめぐる考古学的・民俗学的興味はつきない。さまざまな種類の貝貨、そしてそれらと機能的あるいは形態的に関連すると思われる石製貨幣やビーズ状貝製装身具などの分布の検討は、アジア・太平洋地域における比較民俗学の重要なテーマとなろう。

筆者は1990年8月11日から一ヶ月、ランガランガ・ラグーン内の一村、アバロロ (Abalolo) に滞在して、海洋資源の利用状況の実態調査を行う機会があり (Goto n. d.)、ムラでは貝貨製作をつぶさに観察できた。本稿では将来の比較研究のための基礎資料として、このソロモン諸島の貝貨製作について現状報告を行う。

アバロロ村の歴史と社会

アバロロの住人は複雑な居住の歴史をもっている。というのは現在の場所に村がおかれて約15年ほどしかたっておらず、それ以前は沖にみえる人工島タルロロ (Ta'alulolo) で村人は生活をしてきた。しかし1970年代初頭の大規模なサイクロンで島は打撃をうけ、島民は本土に移住を開始した。そのとき島民はグワイダロ (Gwa'idalo)、アイラウ (Ailau) そしてアバロロと三つの村に別れたのである (第2図)。それ以来この3村はグアタ (Gwata) という連合をつくり、政治・経済的な連帯をもっている。

*宮城学院女子大学助教授

調査時アバロロ村に居住する人々の人口・年齢構成は第1表の通りであるが、結婚後あるいは独身でも成人に達すると賃金労働や就学のため首都のホニアラにでている若者が多い(第2表)。そのなかにはホニアラを生活の基盤にしている者もいるが、数か月あるいは数週間ホニアラで働いては帰郷し、同じだけの期間ムラで過ごしたあと、またホニアラに行く、といった二重生活をする者も見られる。しかし基本的にアバロロに生活基盤があるとみなされた場合のみ統計に入れている。

アバロロ村の社会組織であるが、父系に重きを置く共系出自、結婚後の居住は夫方と特徴づけられる。そして他のオセアニア社会の例にもれず、実際の家族・親族構成はかなり柔軟である。長男は貝貨やその外の重要な品目を継承し、ムラに止まる傾向があるが、次男以下の男性は婚出する例もある(第3図)。現在では結婚後むしろ首都ホニアラに職を求めるケースが多くなっている。女性の場合は嫁入りが多く、アバロロに嫁入りして

きた女性のうちでは、ランガランガ文化圏出身者が大部分である。しかし、ラウ、コアラアエ、クワイオといった他言語族出身の女性もいる(第3表)。

村から2km程のところには小学校があり8才から12・13才の子供が通っている。宗教に関しては、村人は現在すべてカトリックの信者である。村にはブマ(MbumaあるいはBuma)支局所属の教会があり、村の男性が一人祭司として日曜礼拝などを担当している。

村で日常的に使われる言語は、オーストロネシア(Austronesia)語族のオセアニア語派に属するランガランガ語であるが、男性の年長者でイギリス式の教育を受けた者は英語を話す。英語を解さない人に関しては、村のチーフの息子で、高校で英語教育を受けている男性に通訳を頼んで調査を行った。しかし村の大多数の者はピジン英語を話すので、直接会話することに問題はなかった。

第1表 アバロロ村の人口構成(1990年8月)

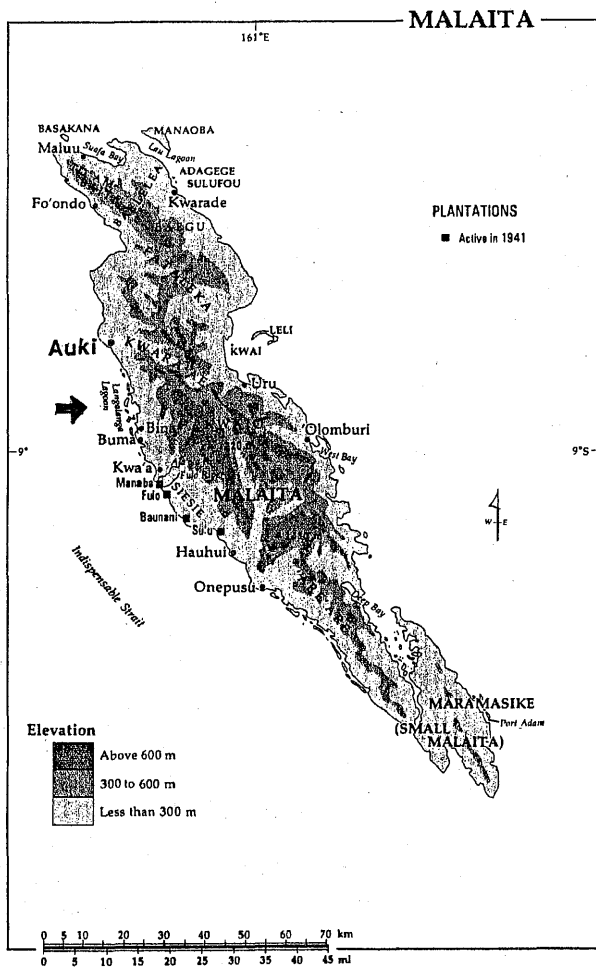
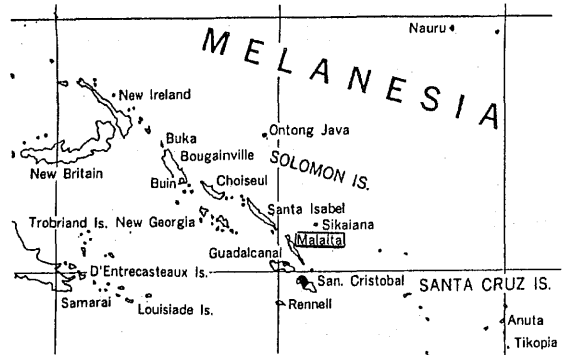
	年 齢 段 階								合計
	0-9	10-19	20-29	30-39	40-49	50-59	60-69	70-	
男性	15	11	3	3	2	1	3	2	40
女性	16	8	12	5	1	3	3	0	44
合計	31	19	15	8	3	4	6	2	88

第2表 アバロロ出身外部居住者のうちわけ

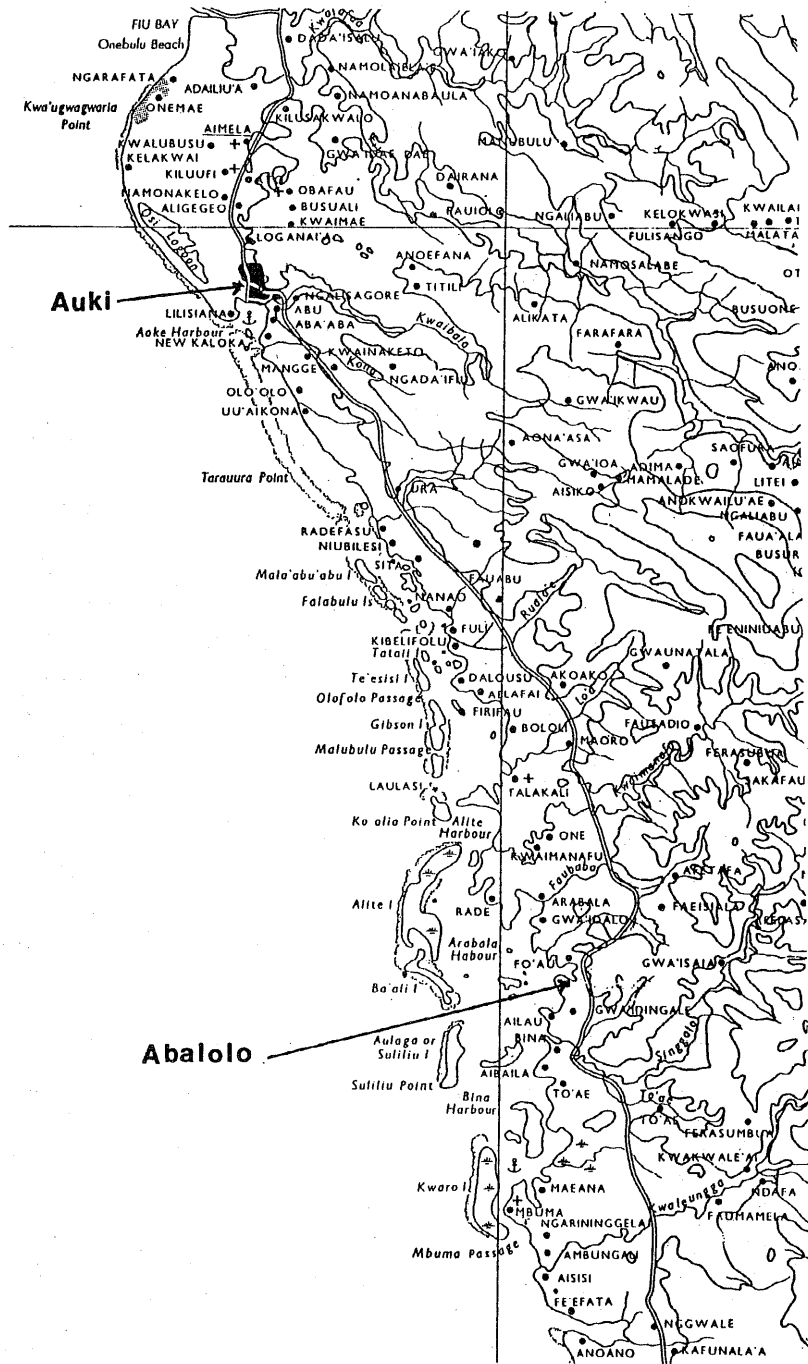
	未婚	既 婚		
	ホニアラ	ホニアラ	ランガランガ	他地域
男性	13	2	0	1
女性	3	1	2	1

第3表 婚姻パタン

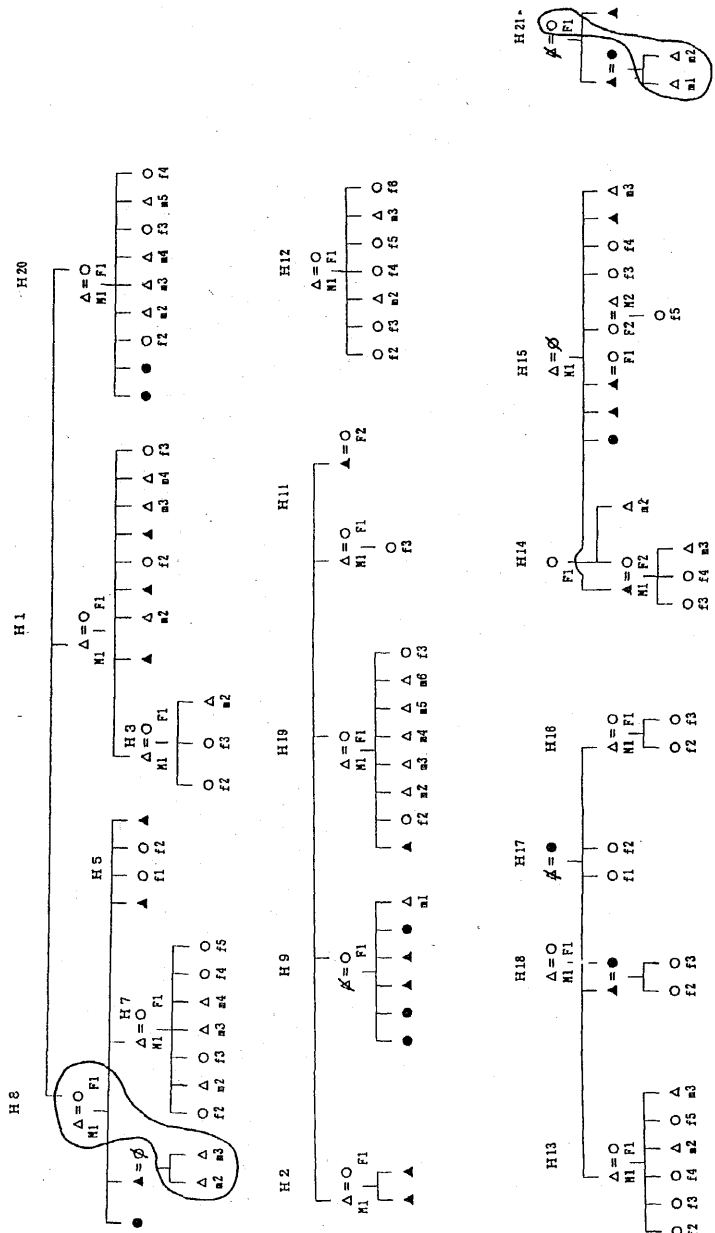
	アバロロ生まれ	婚入者	婚入者内訳 ランガランガ 他地域	
	男性	12	4	(4
女性	5	11	(8	3)



第1図 ソロモン諸島とマライタ島
(Bennet 1987: Figure 10)



第2図 ランガランガ・ラグーンとアバロロ村



記号の意味

	男性	女性
調査時の人ヲ居住者	△	○
外部に居住する者	▲	●
既婚者	M	F
未婚者	m	f

註：H1-M1 はチーフ
 H2-M1 と H12-M1、および
 H13-M1 と H15-M1 は父方
 平行イイトコ

第3図 アバロ村の親族組織

生活状況

ランガランガの村々はすべて標高20メートル以下の海岸低地またはラグーン内の人口島か外島にある。アバロロ村もアラバラ (Arabala) 湾に500メートル程突き出た平坦な岬の上に存在する。村に至る交通路はカヌーやモーター・ボートによる海上路か、村から内陸に歩いて10分ほどの所にある道を通るバス (トラック) である。実際、約15 km 北にある州都アウキに出るためには、たいいていバスが利用される。村人は食料品や衣類・雑貨を買うためにアウキに出ることが多い。しかし村にはチーフ (ビッグ・マン) の営む店があり、缶詰、ラーメン、砂糖、クッキー、ガム、紅茶のような食品、ランプ用燃料のケロシン、石鹼、タバコなどの雑貨が手に入る。パンは売っていないが、周に一回ピナ (Bina) からパン屋がカヌーできて販売する。

周二回、水曜日と土曜日の早朝、ムラに近いバス路線の路上で、ローカル・マーケットが開かれる。ここにはアバロロ、グワイダロからのランガランガの人々と、周辺のコアラアエおよびクワイオの人々が集まり、物々交換または現金で交換が行われる。ただし筆者の滞在中は、交換対象はほとんど嗜好品のピンロウの実と葉で、コアラアエ・クワイオの人が売り、ランガランガの人々が現金で買うというパターンであり、まれにサツマイモ、ヤムイモ、および野菜類がみられた。

生産基盤

人々の利用する食料資源は、ほとんど海か海岸近くの小規模な畑からえられるものである。村人の利用する環境ゾーンを列挙してみると、外海、外島周辺およびラグーン内に点在するリーフや浅瀬、ラグーン、村のある海岸とその前のリーフ、村の周辺海岸に広がるマングローブ帯、河川の河口と下流域、海岸段丘の斜面などである。

畑は世帯ごとに所有されており、耕作も世帯単位で行なわれるのが一般的である。ただし必要に

応じて近い親族の者が耕作を手伝いに行く。畑は河川付近の低地から丘陵地帯の斜面につくられた焼畑である。作物は数種類のサツマイモ (たとえば *Ipomea batatas*) が主体で、キャッサバ (*Manihot esculenta*) が加わり、それに在来の野菜類が栽培される。そして最近換金作物として導入されたパイナップルを植えている世帯もある。ヤムイモやタロイモを植える世帯は少なく、一世帯だけ貝貨の交換でえたバナ *pana* (*Discorea esculenta* ヤムイモの一種) を栽培する家族があった。また河川付近に湿地に生息するタロイモの一種、カカマ *kakama* (*Cyrtosperma chamissonis*) は救荒食として利用される。そしてアバロロ村の畑作物はほとんどが自家消費である。

アバロロ村の畑の総面積は約15,000平方メートルであり、畑一面の平均は620平方メートル程度である。一世帯で畑を一から三面所有している。隣のクワイオ語族・フォアウ (Fo'au) の村では、畑一面の面積はずっとひろく、作物の種類も多い。そして換金作物も植えられている。また畑には耕作小屋もあり、長時間の耕作時の休息や食事、そして作物乾燥に使われる。しかしアバロロではそのような施設をもつ畑はない。フォアウで聞いたところ、彼らは夫婦で一日中畑に出ることも珍しくないというが、アバロロでは観察した限りにおいて、耕作はたいいてい一人で、しかも半日以内で行なわれる⁽¹⁾。

一方、アバロロの村でははラグーン内の漁労活動は日常的活動である。現在もっとも頻繁に行われるのは釣漁で、おもに男性が個人で行うが、女性とくに既婚女性も釣漁を行うのはめずらしくない。さらに女性は海岸やリーフで貝やカニなどの採集を行う。また女性はカヌーで河口部にでかけ、主食のコア *ko'a* (マングローブ、*Bruguiera gymnorhiza* の種) を採集してくる。コアはケケ *keke* (*Geloina erosa*, ヤエヤマヒルギシジミ) とよばれる貝で削られ、ココナツスープにいれて毎日の食卓にのぼる。一部の男性はリーフの外で外洋漁を行う。取られた魚介類はだいたい自家消費されるが、たまにマーケットあるいは自分で隣ムラの

フォアウまでカヌーで出かけて行って農作物と交換される。漁法や漁業効率、月例や潮干と漁労活動との関係、漁法の個人差などについての詳細はソロモン政府提出のレポートで論じているので (Goto n. d.), ここでは触れない。

貝貨の機能と種類

貝貨は婚約料 (galina), 結婚時の婚資 (kwatena) として夫側から妻側に支払うのに必要なほか、葬儀代、賠償などのために使われる。共同研究者の秋道はマライタ島北部のラウ地方で、葬儀のさいランガランガで作られた貝貨が葬儀代として使われているのを1990年9月に観察している。ランガランガでは、貝貨はさらにもっとも貴重とされる家畜のブタ、また儀礼的意味をもつヤムイモのバナ、そしてやはり生活に欠かせないカヌーを得るときに支払われるものである。

現金経済が浸透し、貝貨が現金収入の手段としての意味を強める現在でも、貝貨製作を行なうのは、ランガランガの人々だけである。アバロロと目と鼻の先にあるコアラエ系統のフォアウの村では、一切貝貨製作は行なわず、貝貨や貝貨製装身具は交換でえるか、購入するのみである。

ランガランガで製作される貝貨 (bata) に使用される貝には次の4種類ある:

- ケエ ke'e *Beguina semiorbiculata* (暗赤色, アマボウシガイ)
- ロム romu *Chama spp.* (赤色, キクザルの類)
- カカヅ kakadu *Anadara granosa* (白色, ハイガイの類)
- クリラ kurila *Atrina vexillum* (黒色, クロタイラギの類)

これらを丸く整形して、中央に穴をあけ、ネックレスのように糸で繋ぐのであるが、ムラで観察した貝貨には3種類ある。ケエから作るサフィ (safi), カカヅから作るイサエ・ガリア (isae galia), そして上記4種類の貝を組合せたアクアラ・アフ (akwala afu) である。アクアラ・アフはコアラエ語ではタフリアエ (tafuli'ae) と呼

ばれる。ランガランガ以外ではこちらの名称の方が一般的である。

サフィは6・7フィート (2m前後) の長さ一本で一単位である。ランガランガ地域では使用されず、マライタ島中央および南部の部族と交換される。イサエ・ガリアは4つ折りにしたカカツ貝の糸 (これを fura と呼ぶ) を十本束ねる。ランガランガで婚資などに使われる。

アクワラ・アフは「十本一束」という意味で、3・4種類の貝を組み合わせた糸をマングローブから作った細い板に通して十本並べる型式である。ランガランガ、コアラアエ、クワイオで使われるほか、島北部のラウ地方の人々とも交換される (Cf. Ross 1978)。アクワラ・アフは長さや作り方によってさらに細分される:

- awae-rarate (両腕を広げて、顎の下に垂れる長さ; 原義は顎の先)
- obe-susu (両腕を広げて、胸まで垂れる長さ; 原義は胸の上)
- tari-bo'o (両腕を広げて、へそまでくる長さ; 原義はへそに届く)
- gwae-uruuru (両腕を広げて、膝に届く長さ; 原義は膝の先)
- buigao (両腕を広げて、足の下で踏める長さ; 原義は中央に立つ)
- maifuo (十本の糸が中央で網状に交差するように作った型式; 原義はひし形の網)

クーパーによると、1967年次ではアクワラ・アフは10ドル (オーストラリア・ドル) であった (Cooper 1971: 272)。現在は100ドルから500ドルという値段の幅がある (1ソロモン・ドルは60円)。もちろん、長いものほど高価なのだが、とくにマイフオ (maifuo) は網の部分が手が込み、最も値段が高い。そしてマイフオの網目にはロム貝が使われる。この貝は内部が全体に内側は白いが、中央部だけ赤い。そこを貝貨用に使うのだが、十分な色調がなく価値の低いものを romu ko, オレンジがかった色調をもちネックレスなどに使用されるものを faraga, 真っ赤でもっとも高価な

第4表 貝貨製作の過程

	製 作 の 過 程							
	荒割り	整 形	研 磨	穿 孔	ヤスリ	加 熱	糸通し	貝貨**
カカツ	+	+	+	+	+*		+	af/ig
ケエ	+	+		+	+	+	+	af/sf
クリラ	+	+		+	+		+	af
ロム	+	+	+	+	+		+	af(mf)

* isae galia は行なわず

** af (akwala-afu), ig (isae galie), mf (maifuo), sf (safi)

ロム貝を firai として区別し、貝の選択が重要であることが窺われる。firai のみを使った maifuo はとくに bata firai と呼ばれ最高級の貝貨とされる。

貝貨の製作

4種類の貝は第4表に示した通り、同じ様な行程によって貝貨用に加工される。貝はまず石の台 (fou-li-ui, fou は石の意味) 上で、鉄の錐によって荒割される。これは主に蝶番や貝周縁部の不用部分を取り除くためである。このようにしてできた、貝の破片 (kwai fuloa) を指で縦につまんで石台のうえでチョンチョンと叩きながら、廻りを丸く整形し、半裁されたココナツ貝の容器 (teteu) に入れる。その結果直径1cm前後のディスク状貝片ができるが、これを didia suiro と呼ぶ。

ロムやカカツのような比較的厚く、貝外側のザラザラが残っている貝は、表面を平にするため、まん中がくぼんだ砂岩の台 (fou-li-safa) の上で研磨される。

この作業は、半裁した球状の石灰性研磨石 (ma'ai) を両手でもって、貝片をならべた面を下にして、水を台にかけながら研磨を行うものである。このさい fou-li-taradi と呼ばれる赤褐色の脆い砂岩を研磨材として加える。研磨作業自体は一回30秒程度で終わるが、一度に50個前後の貝片を研磨石

の上に並べて乗せたり、ひっくり返したりするのに手間がかかる。

次に板の台の上で貝片の中央にハンド・ドリルを使い穿孔をするが、この作業を futa と呼ぶ。穿孔は両側から行われる。そして穿孔された貝片 (bata kwakwa あるいは kwakwa suiro) を釣糸に通す。この作業を urufia と呼ぶ。その貝片を通した糸 (galae safi) を二・三本まとめて船型をした細長い薄い木の台に固定し、カンナがけのような動作で、ヤスリ石 (fou-li-ara) によってヤスリがけをする。ヤスリがけによって、直径5mm程度のビーズ状貝片ができあがる。

さらにケエ貝の場合は、鉄板ないし逆さにした鉄の皿の上で加熱される。木の串で貝片を煎るようにすると暗赤色の貝片はみるみるうちにあざやかなオレンジ色に変色する。この変色の過程は para と呼ばれる。変色すると、すばやく串で貝片を脇に置いてある水をはった皿にいれ冷却する。加熱作業をするときは、火力が強く長持ちするマングローブの種コアを燃料にするが、今はほとんどの者が、炭やケロシン・ストーブを使う。

この作業は簡単に見えるが、もっとも年季のいる仕事である。というのは加熱が足りないとか色がでず、加熱しすぎると白くなり、とりかえしがつかなくなるからだ。マーケットでは色が買い手の判断の決め手になるという。後述するように村では、貝の整形や穿孔をアルバイトで他人に行わせ

場合があるが、ランガラン生まれで村では貝貨製作のもっとも上手という評判の女性は、加熱だけは他人にまかせられないといていた。

貝貨製作の変容と伝統的技術の証拠

伝統的な貝貨製作と現在のそれで大きく変わっている点がいくつかある。まず材料の貝が枯渇して、今では現金で購入する必要がでてきたことだ。クーパー論文では、1967年段階ですでに、ランガランの人々がロム貝の供給を他地域に材料を依存し始めていることが指摘されている (Cooper 1971: 271)。現在では、賃金労働が貝貨を売りに首都ホニアラにてた者が、帰りに貝の詰まった25 kg 入りの米袋を買ってくるのが観察された。

調査時での貝殻の値段および供給地は:

ケエ 80ドル(一袋あたり)ーソロモン西部州
(ニュー・ジョージア諸島)

カカツ 15・20ドル ーマライタ島南部

クリラ 15・20ドル ーソロモン西部州
・ラッセル諸島

ロム 10個で10ドル ーマライタ島南部

一ヶ月の滞在期間中、村人がランガランガ・ラグーンの中で貝貨用の貝を採集してきたのは一度だけであった。そのときは、よく潜水漁を行っている既婚女性が三人でカヌーののってでかけた。三人のうちの一人が生まれたラデファス (Radefasu) 村に行き、まず親戚に許可をもとめ、干潮時をみはからってリーフに潜水しロムとケエを採集してきた。貝の肉はスープにして食べ、貝殻は天日にさらして乾燥した。

次に変化している点は製作用具である。まず荒割りや整形をするのは細長い石の鎚を使っていたし、ケエ具の変色は fou-li-para と呼ばれる平石の上で行っていた。また穿孔には木製のドリル (futa) が使用された。それは70 cm 程度の竹の軸を交差させ、縦軸 (suwa) の下の方に亀骨からつくった直径10 cm ほどの円盤 (taka) をつけるものである。軸の先にはチャート製のポイント (radi) をつける。ポイントはケエの貝殻で剝離

整形が行われた。またヤスリがけの石は川で採集する砂岩であった。

筆者はかつてモラがあったという伝承をもつ、沖合いの人工島や外島に、伝統的貝貨製作の証拠を求めて出かけたことがあった。証拠といっても考古学的遺跡から出土する可能性の高く、しかも貝貨製作にしか使用されなかった遺物を考えねばならない。たとえば穿孔をするドリルの軸部は木製であり、あまり発見は望めない。しかしドリルの先端に使用したチャート製の尖ったポイント、また研磨に使う川石のヤスリ、そして貝貨製作時に廃棄される材料となる貝の屑などは期待できよう。そして実際に、訪れた五つの島のうち、三つの島で、ヤスリ石、ドリル用のチャート石、貝貨製作に使うカカツ貝を見つけ、同行した村人に確認した。ヤスリ石は研磨によると思われる溝がついていた。

貝貨製作に見られる人間関係

基本的に貝貨は世帯単位で製作する。妻の整形した貝を夫や息子が汗だくになってヤスリがけするという光景をよくみかけた。しかし男性が整形をしたり、穿孔をしたりする姿は見られなかった。一方、女性は手が足りないときはヤスリがけもする。つまり全行程に携わるのは女性だけである。また整形や穿孔は子供でもでき、母親のそばで子供が男女をとわず手伝っていることは日常茶飯事である。とはいっても筆者も試してみたが、整形には訓練がいる。貝貨を作る風習のない部族から婚入してきた女性は1年くらいで一通りできるようになったと話していた。整形に比べ、穿孔は比較的容易だった。ただ軟質のクリラの貝片にくらべ、硬質のケエはすぐ割れてしまい難しかった。

朝食が終わる8から9時頃になると、女たちは自宅内や高床の下で貝貨を作り始める。このさい女たちはしばしば他人の家を訪ねて一緒に作業をする。第5表は、一時間のうちにムラ全体を回って、誰がどこで作業していたか観察した結果を示すものである。観察は日と時間帯を変えて十回

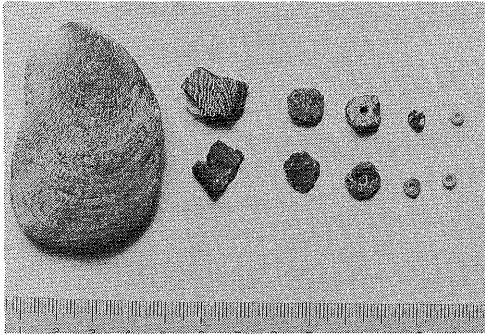


写真1 ケエ貝の加工過程：左から貝，荒割り後，整形後，穿孔後，ヤスリがけ後，変色後



写真2 イサエ・ガリア

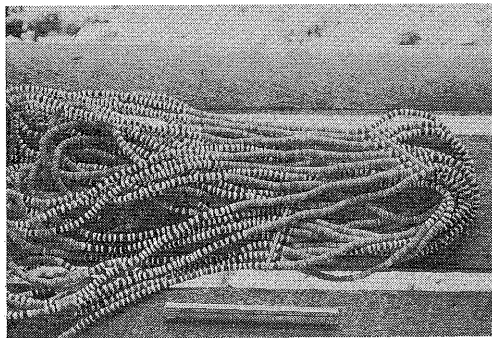


写真3 アクワラ・アフ

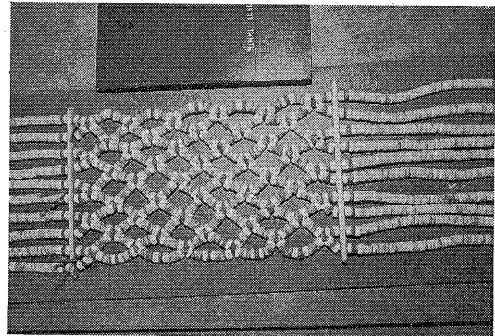


写真4 マイフオの編目部分



写真5 ケエ貝の荒割り



写真6 整形加工

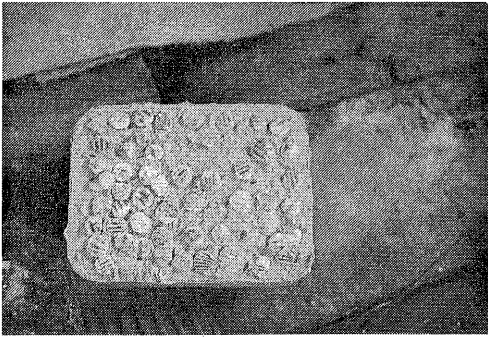


写真7 カカツ貝の研磨

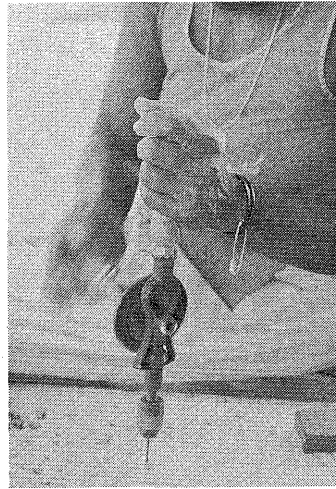


写真8 穿孔作業

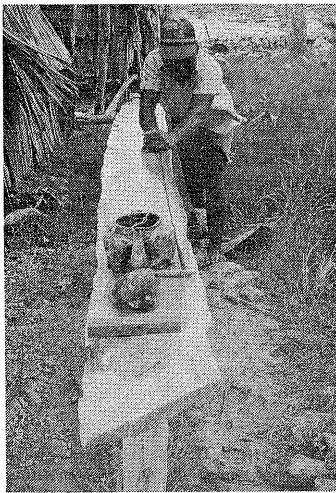


写真9 ヤスリがけ



写真10 変色作業

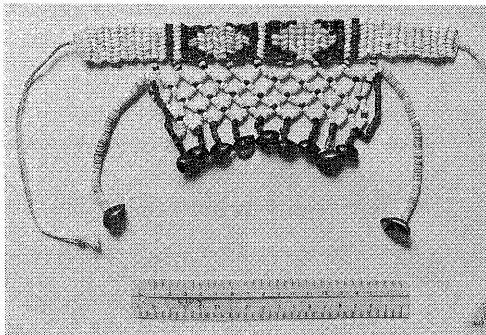


写真11 ビーズ状貝製ヘッド・バンド

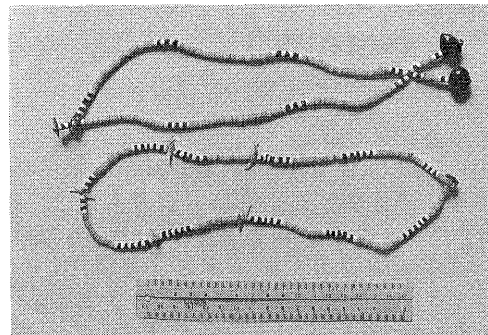


写真12 ビーズ貝製品ネックレス
(下の資料はイルカの牙も使用)

第5表 女性の貝貨製作場所

女性	世帯												合計
	H1	H2	H5	H7	H11	H12	H15	H16	H17	H19	H20	H21	
H 1 - F1	5												5
- f2			7										7
H 2 - F1		3							2		1	1	7
H 5 - f2			7										7
- f3			9										9
H 7 - F1				2	1								3
H11 - F1					7								7
- F2					7								7
H12 - f2					1			4					5
H15 - F1								3					3
- F2								2					2
- f3								4					4
- f4								4					4
H16 - F1									2	2			4
H17 - f2										9			9
H19 - F1											2		2
- f2	1		6										7
H20 - F1											2		2
- f2			5								3		8
H21 - F1												5	5
合計	6	3	34	2	16	0	17	2	13	2	6	6	107

行っている。この表から、グループ形成にはある程度規則性のあることが読み取れる。第6表は四回の観察時を例に、ムラ人がどのように移動し、そして誰と誰と一緒に作業しているかを示すものである。貝貨製作のためには共同作業をする必要はないので、作業グループはいわば「おしゃべり・グループ」であり、むしろ貝貨製作集団の形成には、女性たちのさまざまな人間関係が投影されている。

既婚女性は義理の姉妹同士（H11のF1・F2）、あるいは姉妹や兄嫁たち（H15のF1、F2、f3およびf4）と作るのが観察された。H15では既婚女性二人（H15-F1、F2）と未婚女性二人（f3、f4）と一緒に製作しているが、F2は貝貨を作らない地方からの婚入者である。

H2のF1（30代後半）は自分の家以外で作業した四回のうち、H20およびH21で一回づつ作業している。そのさい、相手はいずれの場合も既婚

女性（H20-F1およびH21-F1）であった。さらにH2のF1は、H17でf2と二回作業している。後者は20代後半の未婚女性であるが、彼女が共に作業する場合、相手は20・30代の既婚女性（H2-F2、H16-F1）ばかりであった。これは同じ年齢のH5のf1が必ず未婚女性と作業しているのと対象的である⁽²⁾。

未婚女性は同世代の女性同志で家の遠近や親族的距離を問わず集まる傾向にある（H5の例）。H5ではこの家に住む姉妹を中心に、床下で未婚の10代から20代の女性三・四人が集まって、ラジオを聞きながら作業をしている。彼女たちは作業グループをつくっていて毎日かわるがわる一人のために作業する。そしてこのグループに既婚女性に加わることは一度も観察されなかった。たとえばH5のf1およびf2の兄嫁であるH7-F1、また祖母であるH8-F1は、H5で一緒に調理や食事をするのことはあったが、ともに貝貨製作をす

第6表 貝貨製作集団

	世帯											
1990 日時	H1	H2	H5	H7	H11	H12	H15	H16	H17	H19	H20	H21
8/20 9:00- 10:00	F1	M1	f1 f2		F1 F2		F1 f3 F2 f4			F1	M1 F1	F1
			f2 →			f2 →					f2 →	
	F1		←								f2 →	
8/27 9:00- 10:00	F1		f1 f2	F1	F1 F2		F1 f3 F2 f4	F1				
			f2 →					← f2				
			←									
	F1											F1 →
8/31 14:00- 15:00		F1	f1 f2	F1	F1 F2		F2 f3 f4		f2		M1	F1
			f2 →									
			←									
9/10 15:00- 16:00	M1				F1					F1	F1	F1
									F1 →			
									f2 →			
	F1											

るのは観察されなかった。

H1 の F1 は観察された五回すべて、自宅で製作を行っていたが、その娘 f2 (10代後半) は七回中すべて H5 で作業するという対照性が観察された。H19 の f2 と H20 の f2 (共に10代後半) は自宅でも製作を行うが、大部分は H5 のグループに加わっている。しかし同じく10代後半の H12-f2 は、観察された5回のうち、四回は H15 のグループと作業していた⁽³⁾。

また H5, H11, および H15 の女性たちは、自分の世帯以外で作業したのは一度も観察されなかったが、逆に H12-f2 は他の世帯でのみ作業していた。さらに既婚女性の H1-F1, H20-F1, および H21-F1 は他世帯で作業するのは見られなかった。

さて、このような人間関係とはべつに、ムラで

は一時的な雇用関係も見られた。

一部の世帯では、村人をアルバイトに雇って製作を行う場合があったのである。その賃金は穿孔した貝片を200gのサバ缶一杯つくるのに1.5ドル程度である。また男がヤスリがけのために雇われて働く場合、賃金はサフィー本につき3ドル程度であった。

筆者がムラに入る数カ月前から、チーフの経営するムラの店では穿孔したケエ具の貝片を30個で20セントとして使用できるようになったという。そして子供がお手伝いをした小遣いとして、自分で穿孔した貝片をもってガムやアメ玉を買っている姿がみられた。貝片ひとつひとつは糸に通さなければ貝貨あるいは装身具として価値のないものだったが、今は「パーツ」として価値をもってきたのである。これも現金経済の浸透の影響であろう。

貝貨の所有と交換

貝貨を製作するムラであるから、筆者は貝貨は各世帯に大量にあると当初思っていた。しかし筆者が一日がかりで村全体に所有されている貝貨のセンサスを行なったところ、全世帯のうち貝貨を現在所有するのはたった二世帯であった。一世帯は完成したばかりのイサエ・ガリアを一本もっていたが、近々マーケットで販売する予定という。もう一世帯では1年ほど前にラウ地域から婚入してきた女性がアクワラ・アフを三本もっていた。これは彼女が結婚するさい夫（つまり今住んでいる家の息子）の親が婚資として彼女の親に払った五本の貝貨のうちの一部である。彼女の親が嫁入りのときの持参金として彼女にもたせたものである。結局この家からでていった貝貨の一部が嫁と共に戻ってきたわけだ。

センサスの一週間前に上記以外二世帯で貝貨があることを筆者は記録している。一世帯はサフィを数本、もう一世帯はアクワラ・アフのなかでもっとも高価なマイフオを一本もっていた。しかし前者はすでに販売しており、後者は嫁入りしてきた妻の弟の婚資用としてすでに実家に送ってあった。またセンサス時には、別の世帯で完成間近のマイフオをもつ未亡人がいた。彼女も完成したらすぐに甥の婚資として他村にある自分の兄弟の家に送る予定と話していた。

筆者が滞在中世話になったムラのチーフの家でも現在は所有する貝貨は一本もない。貝貨は息子

が婚約したら一族で製作したり、持ち寄ったりして蓄積するという。現在はその予定がないので、貝貨はないという。ちなみに調査時で婚約をしている男性はムラでは一人もいなかった。

農耕・漁撈活動と貝貨製作

貝貨と他の生産活動との関係も問題にしなくてはならない。ムラの生計は自給の傾向が強いが、農耕や漁撈といった直接的生産活動と貝貨製作が、どのようにムラ内部および各世帯で、時間配分や分業がなされているのであろうか。筆者は生態人類学で開発された方法で時間配分（time-allocation）の調査を行なった。その結果15才以上の男女が生産活動に費やす時間配分が第7表のような結果となった。

オセアニアで一般的なように男が漁撈、女は農耕というパターンは傾向としてみられるが、社会的分業としては存在しない。筆者は各世帯のサイズ、生産者と扶養者の比率、畑の数と面積、耕作頻度、筆頭生産者（世帯でもっとも多く耕作をする者は誰か）、生産効率（労働投下と生産物の比率）などに関する調査も同時に行なっている。その分析結果の詳細を述べる余裕はないが、世帯によっては筆頭生産者が男である場合もみられる。一方漁撈に関しても同様の調査を行なっているが、女性が男性同様、釣漁をしたり、潜水漁をして貝を採集したりすることはめずらしくない。

しかし貝貨製作は圧倒的に女性の仕事である。

第7表 生産活動に対する時間配分

	観 察 人 数	貝 貨 製 作	農 耕 採 集	漁 撈	合 計	時 間 / 生 産 者
男 性	8	13 (40%)	6 (18%)	4 (42%)	33	4.1
既婚女性	13	36 (59%)	23 (38%)	2 (3%)	61	4.7
未婚女性	9	54 (91%)	5 (9%)	0 (0%)	59	6.6
合 計	30	103 (67%)	31 (21%)	16 (11%)	150	5.0

男性が行なうのはすでに述べたように、ヤスリがけで、ほかにはのんびりと糸通しをしている姿を見かける程度である。これに対し女性のなかでも未婚の女性が費やす時間は比較にならない。一日の生産活動の時間5・6時間のうち9割を貝貨製作に費やしているのである。一世帯を単位にとると、農耕、漁撈、貝貨製作に割り振る時間は、世帯のサイズ、扶養者の比率、気象や月齢サイクル（漁撈の場合）、家族構成（適齢期の男の有無）などの要因の間の関係できまってくるように思われるが、若い未婚女性は食料生産は父母にまかせて貝貨製作に集中している傾向があった。

貝製装身具の使用

貝貨を作るために加工されたビーズ状貝片は、様々な伝統的装身具にも利用される。最近では伝統的に使われる貝以外にも紫色をしたツブ貝を加えて、新しい型式のネックレスやピアスを作って、装身具として自分たちで使ったり、マーケットで販売したりしている。

貝製装身具には額バンド (fo'o dara)、肩掛け (sau sako)、アームレット (mae nima)、首飾り (alualu) などがみられる。このような装身具は伝統的には儀礼のさいに身につけたが、最近では女性や若い男性がネックレスやピアス類を日常的に使用している。ムラにはランガランガ以外の文化圏から婚入してきた女性も三人いる。彼女らはすべて結婚後から貝貨製作を始めており、また三人ともビーズ状貝製ネックレスを日常的にしているのが観察された。つまり婚入してきた女性、あるいはその世帯は、貝貨製作や装身具といった物質文化の面からは区別できなかった。

アバロロ村では若い世代がビーズ状貝製ネックレスをしている傾向がみられた（第8表）。しかしこれは新しい風習のようで、年配の世代は自分の子供にさせている人でも、自分でする人は少ない。逆に年配の女性は金属のネックレス（ロザリオなど）をしているケースがみられた。一方隣のフォアウの村で観察すると、未婚女性や20・30代

第8表 貝製ネックレス装着パターン
(15歳以上の女性)

	年 齢	する	しない
アバロロ村	30歳以上	3	8
	30歳未満	14	2
フォアウ村	30歳以上	0	8
	30歳未満	3	6

の既婚女性の中にはネックレスを付けている者がいたが、年配女性はしていないという似た傾向がみられた（第8表）。しかし全体の装着率はアバロロより低い。フォアウの村人にとって彼らにとって貝貨製のネックレスはまだ高価なものようだ。

フォアウのムラ、および週2回開かれるマーケットで観察したところ、コアラアエやクワイオの女性は安く買えるセルロイド製のビーズ・ネックレス（外見はビーズ状貝製ネックレスに類似）をしている例があった。一方アバロロ村および周辺のランガランガのムラでは、女性はそのようなものは身につけない。おそらくランガランガから他の言語族にかけて、若い世代を中心に、貝製ネックレスはひとつの流行として普及して行く途上にあると思われる。

経済効率の問題

現金経済の急激な浸透によって、貝貨のもつ社会・経済的意味も変化している。とくに貝貨はランガランガの現金収入源としてのウエートが大きくなっている。貝貨製作の経済効率を推測するのは、必ずしも容易でないが、筆者は貝貨製作に費やされる時間、材料や道具の費用、そして貝貨の値段などから、ある程度の推測を行った。推測はもっとも頻繁に作られ、また一種類の貝からなるサフィについて行った。

まず一袋に入っているケエ具の個数を、貝殻の平均的重量から推測した。次に五人の女性を観察

し、荒割り、整形、穿孔に要する時間をストップウォッチを使って十回づつ計測した。これは貝を10個割る時間、そして10個の貝片を整形および穿孔する時間を計ったものである。また一人の女性に、平均的大きさの貝から、何個貝片がつくれるかは実験してもらった。というのは、すばやく作業されると、できてくる貝片の個数を数えられないからである。さらに整形と穿孔の段階で、失敗する確率（壊れてしまう割合）も観察した。また糸10cmあたりに何個貝片が通されるか平均をとり、そして長時間かかるヤスリがけの時間は聞き取りから推測した。さらにビーズ状貝片10個あたり加熱にかかる時間と糸通しにかかる時間を計測した。

この結果、一本のサフィを仕上げるのに、10時間程度かかり、貝殻一袋（25kg）から大体一九本のサフィができる、との推測結果をえた。また、加工の結果、重量にして貝殻の95%の部分は廃棄されることがわかった。さて貝殻を一袋買った金（80ドル）を差し引いて、サフィ一本がホニアラのマーケットで30ドルで売れるので、一時間の労働が2.58ドルの現金価値を生む計算になる。ムラ近くで売買すればサフィは一本20ドルであるので、この場合価値は1.72ドルとなる。

しかしこの推測は、整形や穿孔の過程での失敗率がそれぞれ一割という高い水準で計算しており、また一個の貝からできる貝片も「慎重に作業したとき」の値を使用している。そして通称25kgの袋も、バネ計りで計測すると、実際はそれに満たないケースが大部分である。つまり実際の効率はもっと悪いはずで、上の推定値は上限的値と考えるべきであろう。

さらに製作道具にかかる費用は入れていない。ちなみに、ハンド・ドリルは20ドル、針は一本2ドル、そして一個でサフィを六本から十本磨けるヤスリ石は3ドルから6ドルする。また、貝貨を売するために、ホニアラのマーケットに行く場合、運賃（船代）や滞在費を加味しなければならない。ホニアラ・マーケットで、アバロロ村人が貝貨を売っている脇で観察したが、貝貨は飛ぶように売

れるわけではなく、この間村人は兄弟や親戚の元に身をよせて毎日売れるのを待つのである。またホニアラでは貝貨の製作グループも活動しており、販売競争もある。

このような状況を考え、費用を差し引くと、ホニアラに行っても貝貨を売ってもえられる利益は一時間の労働あたり1ドル台であろう。ちなみにムラ近くのローカル・マーケットや、隣村からアバロロ村に来て販売されるサツマイモの値段は、1kgで30セント程度であった。またアバロロ村の人々が一時間あたり畑で労働してえるサツマイモの重さの平均を計測したところ、2.7kgであった。単純に計算すると、もしイモを売るなら、一時間の労働が80セントの利益を生むことになる。またアバロロ村の者がコアアラエの者に耕作を頼んで支払ったのが一日5ドルで、これは大体一時間あたり1ドル程度の費用となる。上のべたように現金収入源として貝貨が重要性をまし、若年世代とくに女性がかかなりの時間を費やしているのが現状である。一方筆者が同時に行った漁労活動の調査では、最近ラグーン内の資源が低下していることがわかっている。それもあって、村では若い男は賃金労働のために村を出、女は貝貨や装身具を作るのに集中するという傾向がみられるであろう。そして得た現金で缶詰、イモ、米、即席ラーメンなどを買い、また年々高くなる貝殻を買ってさらに貝貨製作を行う、という経済循環がみられるのである。

変化する自然・社会環境と貝貨製作

— まとめにかえて —

オセアニアの各地で伝統工芸は、開発と経済発展の狭間でさまざまな変化を余儀なくされている。このような状況のもとで、かつて儀礼的、象徴的意味をもっていた工芸品が、商品化、あるいは土産物化して行く傾向も一般的にみられるものである。そして変化する状況下における工芸と集団のアイデンティティーとの関係を捉え直すという試みもある（e.g. Hanson and Hanson 1990；

Mead 1979; Tippet 1968)。貝貨製作はランガランガ生活の基本であり、急激に変化する自然および社会的環境にける役割や意味の変化をまとめておきたい。

<環境的側面>

直接的には資源の乱獲によって材料の貝が取れなくなっていることがあげられる。このため今は現金で材料を入手しなければならない。さらに間接的には水産資源の減少によって、輸入食料品への依存度が高まっている。また医療の普及で人口増加も認められる。その結果、より現金依存度が高まり、貝貨製作と賃金労働の必要度が増しているように思われる。

<技術的側面>

1960年代頃から、ハンドドリルやヤスリ石を買って貝貨製作を行うようになったといわれる。また糸も市販の釣り糸、さらに加熱するための燃料も炭やケロシンを使用するようになった。このような技術的变化によって、迅速にしかも手軽に貝貨は製作されるようになった。伝統的な道具で製作していた場合、特に穿孔などには時間がかかったと村人はいっている。クーバーの論文ではかつてアクアラ・アフ一本を作るのに、女性が一人で一ヶ月かかったという (Cooper 1971: 272)。

<経済的側面>

クーバー論文 (Cooper 1971) から、1960年代には貝貨に現金の値段がつけられていたことが知られる。したがって物価や貨幣価値の変動という外部的あるいは場合によってはグローバルな動きが、特定の交換範囲しかもたなかった貝貨の価値にも影響してきたわけである。また現金収入源として貝貨や貝製装身具が意味をもってきたため、貝貨製作にも一時的な雇用関係が生じてきている。そして最近、貝貨のパーツであった穿孔貝片が、売買できるようになった。買った方はそれを集めて貝貨を作るわけで、一種の分業関係が生じている。これらの変化は、貝貨製作の本質的意味の変化につながる可能性がある。

<社会的側面>

生産活動が基本的に世帯単位で行われるアバロ

ロ村の場合、貝貨製作は村人間のもっとも重要なコミュニケーションの契機である。製作には年齢、婚姻状態、親族関係などに基づくさまざまな人間関係が現れる。それは既成の人間関係が貝貨製作時に反映されるともいえるが、貝貨を製作しない集団から婚入してきた女性、また既婚女性と交流をもつ未婚女性の動きをみると、逆に貝貨製作によって人間関係が形成されて行くともいえよう。村中には家の床下や家の脇を中心に貝貨製作からでた貝殻の屑が捨てられているが、それは単なるゴミステ場ではなく、絶えず作られては変化して行く、人間関係の所産のように思える。

さて今日、婚資としての意味は変わらないが、かつて娘たちは自分の兄弟や親戚のために貝貨を作った。しかし現在では自分自身の収入のために作るようになる。筆者は誰のために作っているか質問したが、とくに対象はなく、現金収入のために作っているケースが多かったのである。男は結婚にさいし、貝貨を供給してくれる家族や親族に負っていたが、現在は貝貨自体が現金で購入できるために、賃金にもとづく雇用関係にも負うようになる。実際アバロ村出身者の間でも、ホニアラで雇用・被雇用関係になっている例がある。このように貝貨をめぐる社会関係も今後急速に変化して行く可能性があろう。

<付記>

本研究は、1990年度より3年継続の文部省科学研究費補助金 (国際学術研究) による調査「熱帯アジア・西南太平洋地域における水産資源利用の文化適応とその戦略 (代表 秋道智弥)」の一貫として行われた。調査にあたり、ソロモン諸島国政府の資源省、文部省およびマライタ州政府の知事、保健大臣、そして水産局の方々には調査許可・調査地選定などにおいて多大な協力をえた。またホニアラおよびアウキ在住の日本人海外青年協力隊の方々からも暖かい歓迎をうけ、アバロ村民およびランガランガの人々からも筆舌に尽くせぬ歓迎をうけた。さらに共同研究者の秋道智弥 (国立民族学博物館)、田和正孝 (関西学院大学)、および須田一弘 (北海道大学) の各氏には公私にわ

たりお世話になっている。なおランガランガで採集してきた貝類の鑑定は大山桂（鳥羽水族館）、山口正士（琉球大学）両先生の手を煩わせた。皆様に心よりお礼申しあげたい。

<註 釈>

- (1) 元来、海岸部や人工島に住むランガランガの人々は農耕に重きをおいていなかった。そしてランガランガは自らを海の民 (wale asi) と呼び、クワイオ、コアアラエらのプッシュの民 (wale asi) と区別してきたのである。
- (2) 筆者の送迎パーティーのとき、村の女性が子供、未婚女性、既婚女性の三つのグループにわかれて、それぞれダンスを披露してくれたが、H17 のf2 だけは既婚女性のグループで踊っているのが観察された。
- (3) H12 のf2 は、H15 の女性たちとともに、貝類、マングローブ、ココナツなどの採集にカヌーでかけるのも観察された。

引用 文 献

- Bennet, Judith A. (1987)
Wealth of the Solomons : A History of a Pacific Archipelago, 1800-1987. Pacific Monograph Series, No. 3. University of Hawaii Press, Honolulu.
- Cooper, Matthew (1971)
"Economic context of shell money production in Malaita." *Oceania* XLI(4): 266-276.
- 後藤 明 (1990)
「貝貨の民族考古学——ソロモン諸島・マライタ島の事例」
『現代思想』12月号:128-137。

- Goto, Akira (n.d.)
"Marine resource management in Langalanga, Malaita Island, the Solomon Islands." In : Tomoya Akimichi (ed.),
A Report Submitted to the Governments of Papua New Guinea and the Solomon Islands.
Hanson, Allan and Louise Hanson (eds.)(1990)
Art and Identity in Oceania. University of Hawaii Press, Honolulu.
- Laracy, Hugh (ed.) (1989)
Ples Belong Iumi, Solomon Islands : The Past Four Thousand Years. Institute of Pacific Studies of University of the South Pacific, Suva and Honiara.
- Mead, Sidney M. (ed.) (1979)
Exploring the Visual Art of Oceania : Australia, Melanesia, Micronesia, and Polynesia. University of Hawaii Press, Honolulu.
- 大林太良・杉田繁治・秋道智也(編)(1990)
『東南アジア・オセアニアにおける諸民族のデータベースの作成と分析』
国立民族学博物館研究報告別冊 11号。
- Ross, Harold M. (1978)
"Baegu markets, areal integration, and economic efficiency in Malaita, Solomon Islands." *Ethnology* 17 : 119-138.
- Tippett, Alan Richard (1968)
Fijian Material Culture : A Study of Cultural Context, Function, and Change. B.P. Bishop Museum, Bulletin 232.
- Woodford, C.M. (1908)
"Notes on the manufacture of the Malaita shell bead money of the Solomon Group." *Man* VIII : 80-84.